

使途不明時間

文 肝付高夫

text by Takao Kimotsuki



鹿児島県 桜島

一年間は三六五日、一日は二四時間。人間が起きて食べて働いて眠るのにこの時間数は充分か、足りないか。これを詳しく調べた結果を古いメモに記録してある。メモによれば「充分である」と答えた人が一六％、そして六〇％の人が「不足している」、残りの二〇％が「まあまあどうやら」となっている。そして、もし必要とすればその時間数は、との問いに対して、二時間くらいというのが四〇％、五時間以上も必要とするのが一二％もいる。いまの人々にとって、どうやら時間は足りないものようである。向田邦子さんが『父の詫び状』を書いたころ、乳ガン手術後の再発の不安もあったらしいが、

「あと何年生きるかわからない。旅行もしたいし、本も読みたいし、おいしいものも食べたい。そう思うと、とても時間が足りない気がするの。そうね。その足りない時間をやりくりするには、睡眠時間を短くするよりほかないわ」

と笑いながら、毎日平均五時間を割る睡眠時間で颯爽としていた姿を思い出す。

だが、向田邦子さんのように、いくらやりくりしても時間は貯蓄がきかない。賃金を手にすると、大抵は、少しずつ使っていくらかの残りを貯金に廻す。それがまとまったところで、大きくパツと使う。時間はそうはいかない。睡眠時間を二時間けずって五日間分の一〇時間をまとめて引き出し一気にレジャーに使う、というわけにはいかない。小遣いは毎月、一定の金額しかない。タバコ代、昼メシ代、コーヒー代と小出しに使う。それに、ゴルフだのファッションだの、やりたいこともたくさんあるいまの世、小遣いはいくらでも欲しい。とても貯金どころではない、とみると、この慢性的に不足するところ、小遣いと時間は相似しているといえる。

手帳に書き込んだスケジュールに沿って、結構、詰めた時間を消化しているつもりでも、一万円をくずすといつの間にか残らないといったことがあるように、使い途のはっきりしない時間も多い。

あなたの日課をみてみてもよい。入社してまず、日本茶とタバコでの

勤務前のおしゃべりだ。タイガースが馬鹿にならないといった前夜のプロ野球の解説、ゴルフのグリップやアドレス談義、漢方薬の効能やカラオケの罪のない講釈、たまには政治や経済の話もあるが、これに女房の愚痴話からんだりして仕事が始まる。昼食を済ませてちよつと眠気の誘われる昼下がり、しばらく情報を交換するとかいって地下の喫茶店で息抜きをする、あるいはお得意さん廻りを端折ってパチンコをする。決して悪いことではなく、むしろ仕事をうまくこなすための潤滑油といったいい貴重なことだが、使い途の不明な時間であることに間違いはない。

仕事に使うことのできる時間と、実際に仕事に使っている時間の比率は一〇対六というのが、欧米で定式化している法則であるときく。

つまり一日八時間を働くとして、実際に仕事に使われている時間は、四・八時間で、あとの時間は、トイレに行ったり、コーヒータイムであったり、雑談や喫煙で、次におこってくる仕事に備えて思考をめぐらすことに使われており、その時間は使い途がはっきりしていないのである。日本の場合もこの傾向は似通ったところがあり、ホワイトカラー族は概ね一〇対五、半分しか働いていないことが多く、むしろ仕事を計画的に進めるには、このようなことを考えておくことのほうが大切かもしれない。

小遣いの使い方、むしろ浪費こそ蓄積につながるといった性質を帯びていることがある。旅、酒、歌、女、性、いずれであれ、おびただしい浪費が生る蓄積につながるという、ややこしいが真実の原理みたいなものも人生にはあるのである。

ひと昔以上に、時間の大切さが増している今日だが、問題は時間をどう使うかである。

ポイントはいますぐやること、そのうちやろうという考えはまず駄目、それに、使途不明の時間をなるべく増やすことだ。そうすることによって物事の処理に優先順位をつけられるし、行き詰まったときの気分転換にも、きつと役に立つからである。

Profile

本名・東正知。1924年生まれ。民間放送勤務の後、ホテル経営を経て、FM局創業。フリーライター。作家。文芸同人誌「原色派」（鹿児島市発行）準同人。著書に「くらの煙草」「カルカノの觸感」「市長の晩餐会」「それぞれの物差し①②」など。